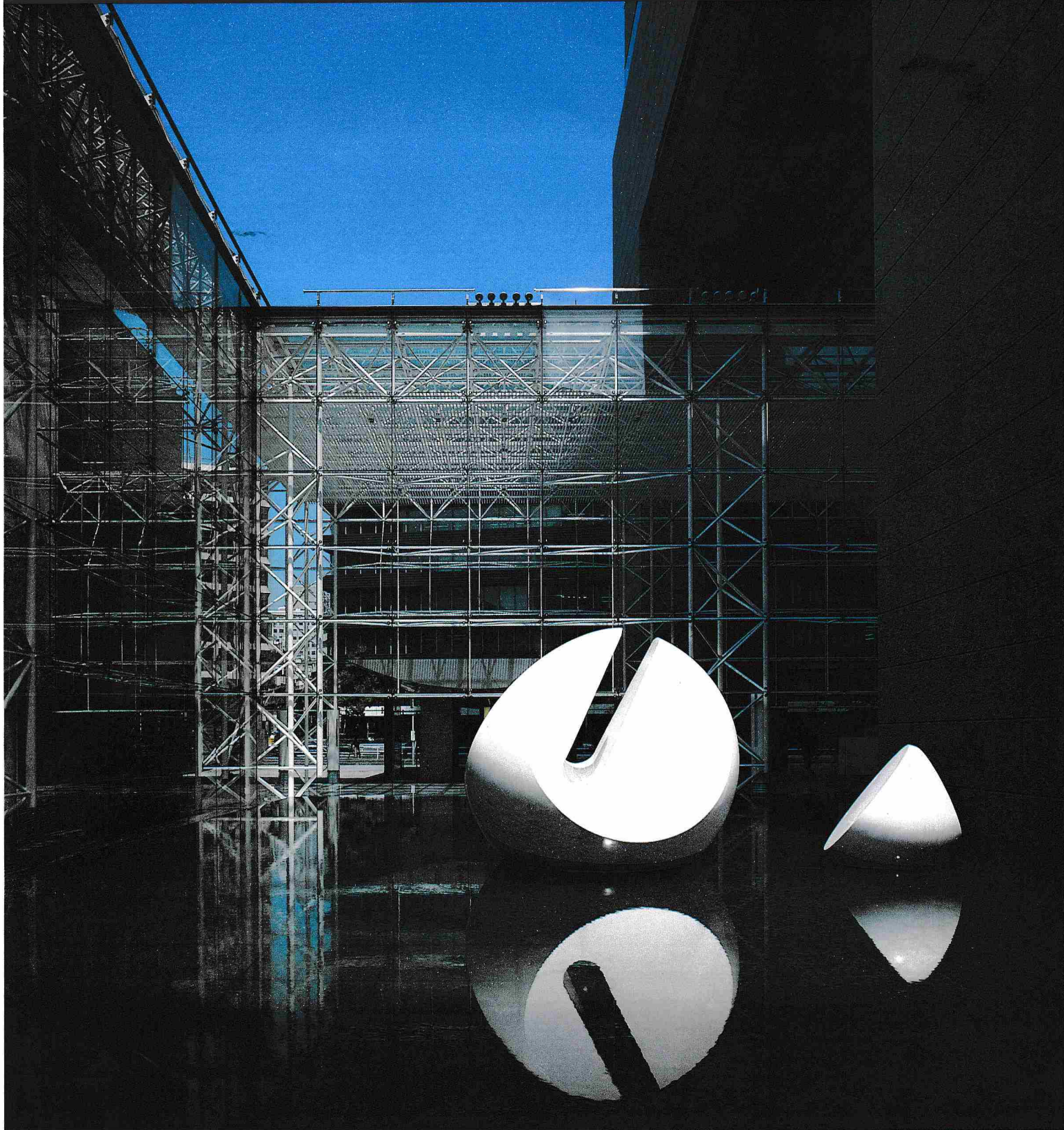


1996/2 NO.20

aaqa

社団法人 日本建築美術工芸協会



CONTENTS

第5回aaca賞	
審査経過並びに審査講評……………	1
時代の華一輪	
工藤甲人……………	5
上山良子……………	6
アピアランス(会員作品紹介)……………	7
aacaトーク	
内井乃生……………	8
磯村才治郎……………	9
久保田一竹……………	10

■表紙写真
「JTBビル」

発行：財団法人日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax 03-3457-1598
〒108 東京都港区芝5-26-20
建築会館6F

振替：東京 1-365085

編集：(社)日本建築美術工芸協会 広報委員会

広報担当理事 柳澤孝彦

玉見 満(委員長) 大多了介、北村孝昭

坂上みつ子、崎山小夜子、高部多恵子

雷田俊男、石田真人

制作協力：㈱SP建材エージェンシー

第5回AACAA賞、審査経過並びに審査講評

審査委員長 内井 昭 蔵 (京都大学教授 aaca副会長)
審査委員 會 田 雄 亮 (陶芸家 aaca理事)
池 田 武 邦 (建築家 aaca会員)
榮久庵 憲司 (インダストリアルデザイナー aaca理事)
近 江 栄 (日本大学教授 aaca理事)
澄 川 喜 一 (東京芸術大学学長 aaca理事)



審査経過

内井昭蔵

平成7年度第5回AACAA賞は例年のように9月30日に応募を締め切りましたが、合計34点の応募作品が集まりました。10月5日第一次審査会を開催、提出資料をもとに審査を行い応募案を検討の結果

- No.4 4 分水嶺
- No.5 JTビル
- No.7 北の幟
- No.9 街路、広場照明とその造形の一連の作品
- No.13 横須賀市役所公園パーゴラ
- No.17 新宿アイランド
- No.19 京都府木津町ふれあい広場
- No.24 東京海上東日本研修センター
- No.27 神戸メリケンパーク・オリエンタルホテル
- No.28 シーホークホテル&リゾートのアトリウム空間
- No.29 ファーレ立川
- No.30 東京都辰巳国際水泳場
- No.32 守口市西三荘ゆりの道整備

以上13作品が選定されました。更に当日審査を進め現場を見る必要のある作品を選定し、その結果をふまえて第一次審査に通った全作品の中から第二次審査で最終決定をすることにしました。現地審査はそれぞれ審査員が分担して作品を見ることとしました。その作品は以下の5点であります。

No.5、No.9、No.19、No.28、No.29

11月24日に全審査員が各々現地審査を持ち寄り審査会を開催し、検討を重ね次の作品を本年度AACAA賞に推挙することにいたしました。

AACAA賞

- No.9 街路、広場照明とその造形の一連の作品
永原 浄氏

AACAA賞特別賞

No.29 ファーレ立川

(立川基地跡地関連地区
第一種市街地再開発事業)

住宅・都市整備公団 東京支社
北川フラム氏
(アートプランナー)

No.5 JTビル

㈱日建設計

総評

内井昭蔵

永原氏は長年、照明並びに灯具のデザインを手がけられ、その高度の技術を経験の中で洗練せられ、みごとなアートにまで高められた点が高く評価されたものであり、特に街路、広場照明とその造形の一連の作品として提出された作品はAACAAが求める環境の芸術化に対し応えられたみごとな作品といえます。

心よりお祝い申し上げます。

この本賞については本年はもう一つ有力な候補がありました。それは「京都府木津町ふれあい広場」(㈱都市景観設計の応募案であります。竹林をモチーフに実際の竹林と共に広がりのある空間の中にステンレスパイプを立て、その一部はパイプに風穴をつくり、風によって笛のような効果を出したサウンドスケープと一体化した町営の広場とモニュメントでありました。造形的にも着想もすぐれたものでしたが、残念なことはその広場にデザインとは無関係に町が公衆便所をつくらたり、彫刻をもデザイナーとの相談もなしにつくられたりして全体のイメージを著しく破壊していることであります。

これはデザイナーやアーティストが正当に発注者とつながっていないことによる悲劇であり、また町も環境芸術の意味、ランドスケープに対する意識を著しく欠いているのが原因ではないかと感じました。デザインや着想がいくらよくても、このような公共芸術がつくれるプロセスをあやまるとこのような残念な結果とな

ることを私達はもっと社会に訴えたいと思います。

今回は特別賞が二つになりました。

「ファーレ立川」は「アートプランナー」という立場の北川フラム氏が92名のアーティストにより109ヶ所に作品をおくといった、あたかも街の空間を開かれた美術館にしてしまうという大変ユニークな発想であります。この試みはみごとに成功したと思います。このようなアートプランを企画することの重要性は誰もが解ることですが、ややもすれば環境や景観というパブリックな側面より芸術作品の売り込みといったビジネス的側面が強くなる危険性があることも事実である。AACAA賞の応募される中でアートコーディネーター的な立場の方が多いのですが、中には画廊的な発想での企画運営があり、いつも審査会では問題となっています。

アートプランナーはどのような根拠で、又どのような方法でアーティストを選ぶかということも明らかにすべきだし、そのアートがその場にふさわしいかどうかをアートプランナーははっきりと判断する能力がなければならぬと思います。問題はコーディネーターという機能的役割を意識し、守るかということでしょう。

「JTビル」の場合は建築という大きな秩序の中に組み込まれたアーティストの作品であり、これは「まち」という「ゆるい秩序」の中にアートがおかれる場合は異なり、建築空間というハードな秩序の中にアートが選ばれるわけであり、コーディネーターはアーキテクトであります。「アート」はそれぞれに独立しているとはいえ全体の建築空間の部分として全体にかかわっています。これは本来のアートやデザインのあり方ですが、反面、「ひらかれた都市空間」との連続性がとりずらく、アートの自律性が損なわれる危険性もあり閉鎖的になりがちであります。JTビルはこの点がうまく処理され、霞ヶ関ビルの足元やアメリカ大使館やJ

ETOROのビルなど周辺一帯が一つのまとまった都市的空間となりました。このことをみても解るように、立派に成功した例と思います。パブリックアートという以上、正しい作り方、正しいプロセスが必要なのではないでしょうか。アートプランナーやマスターアーキテクトといったコーディネーションをする立場の人の責任は大きいし、この職能の確立が問われているのではないのでしょうか。

AACA賞審査講評 會田雄亮

「街路、広場照明とその造形の一連の作品」

近頃は様々な建造物に、夜のライトアップが施され、町にアクセントを付けよ

うとする試みが一つの流行となっている。これは嬉しい現象である。併し、反面、依然として歩道の路面や、街路照明に対して、十分なデザイン的配慮がはらわれていると思われぬ。

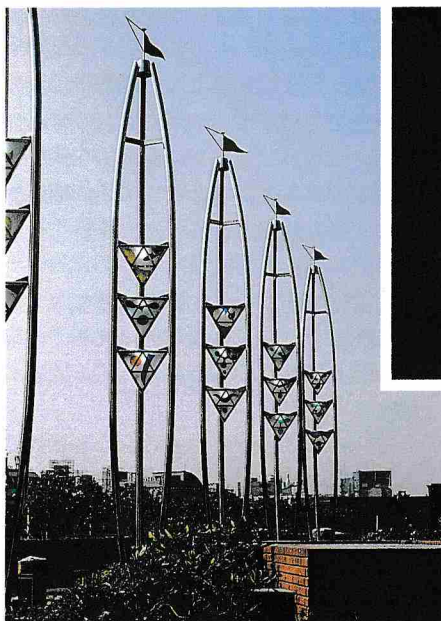
不愉快な色彩の歩道デザインや、いかにもデザインした冷たい街路灯、おまけに近くの商店街などで年末商戦にさきがけ、プラスチックのピラミッドで万艦飾のグロテスクな街灯に取り変えられているのを見て、うんざりさせられている人も多いと思う。云うならば、街路照明は町並みを美しくする為のキーポイントであるにもかかわらず、貧相な状態で放置されていると云えるだろう。

最近の永原 浄氏の手による一連の街路照明は、我々の生活に潤いを与えてく

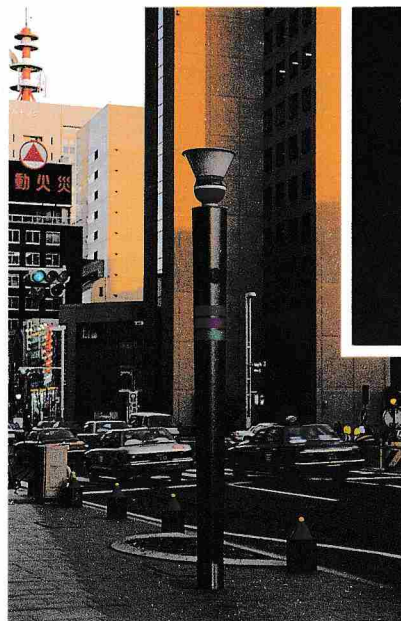
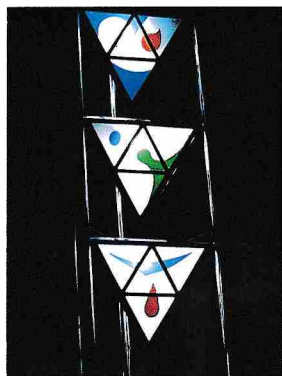
れるものである。造形作家として、照明具の優れた作品を沢山世に出して来た作家であり、特に最近の作品では色ガラスを使った優しい表情の仕事が多くなって来た。

今回受賞の対象になった作品群はステンレスの形態を研ぎ澄まされた肉体とすれば、組み込まれたベネチアガラスは、柔らかくそしてちょっぴり華やいだメイキャップの様に上品な調和を見せている。

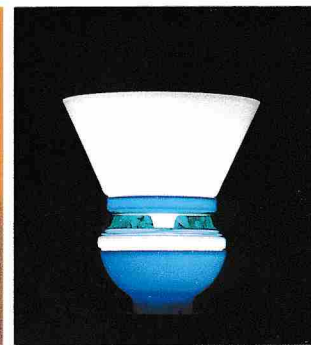
永原氏の作品には、何より十分な経験に裏打ちされた華麗さと安心感がある。街路照明が機能を越え、人の心に温かさを与える作品としての存在感に対し、今回の授賞決定に賛意が深まった所以である。



恵比寿ガーデンプレイス
シティフラッグ



名古屋メインストリート
広小路街路灯



天王洲アイランド街路灯



浜松アクトシティ



永原 浄氏

AACA特別賞審査講評 近江 栄
「ファーレ立川」

ファーレ立川は、立川基地を中心とした住宅・都市整備公団による第1種市街地再開発事業であり、そこで展開された36ヶ国92人の作家による109点におよぶアート計画が「開かれた美術館」として話題を呼んだプロジェクトである。いわゆるパブリックアートの事例としては日本最大の規模であり、世界でも例を見ないプロジェクトだといえる。

現地審査では、新しく更新された街区に文化性を付与するというコンセプトはよく理解できたが、建築計画との連携の

面では疑問に感じる場面が多々あった。

しかし、単に建築デザインの特徴づけるのためにアート計画を位置づけるのではなく、車止めや換気塔などの建築機能物を積極的にアート化するという取り組みは目新しい。

建築計画に対してアート計画のスタートが遅れた事情を考えれば、これは建築との関係性を緊密にする有効な手法であったろう。

また、駅前とはいえ、人の動線を確保しにくい事業地の中で、つねに人々の賑わいが生かされていることを評価したい。これは、作品を設置するという従来の考え方ではなく、作品を人間精神の具現と

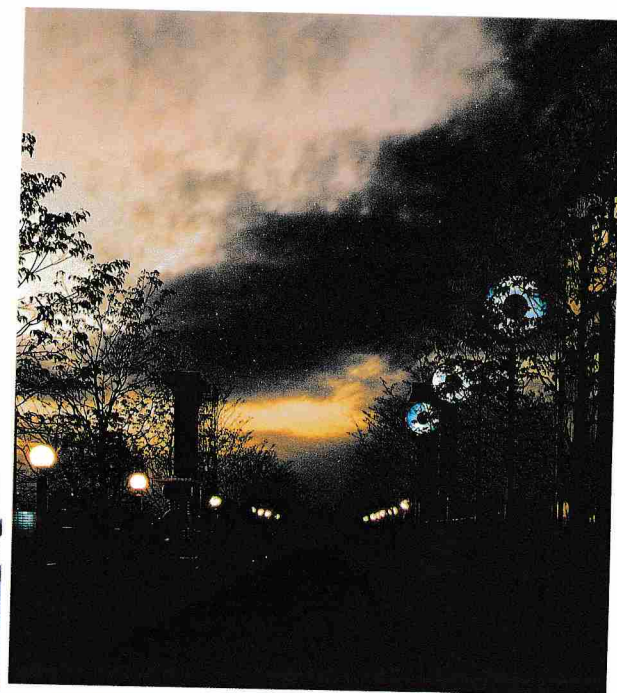
して捉え、街区利用者との関わり方を意識した北川フラム氏のプランの結果といえる。いわば作品が人間の友達として機能しているのだが、ここでは作家の出自が広く世界を網羅し、表現も多様であることが、さらに効果を高めているようだ。

街区としての発信性を確保するために、パブリックアートが少なからぬ可能性を持つということは、このプロジェクトによってはじめて議論の場にのぼることができた。

今後の日本におけるパブリックアートを考える上で、貴重な契機を与えたことに対してAACA賞特別賞を贈ることとした。



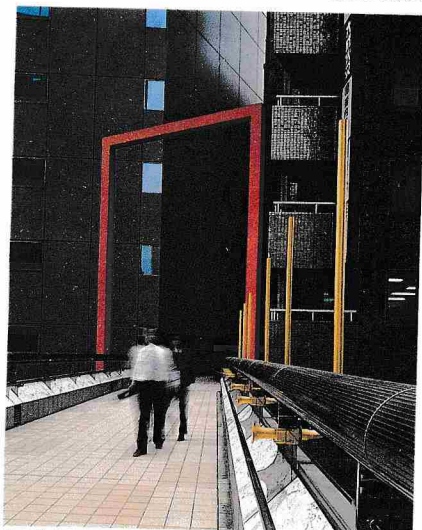
田中 信太郎 ©S.Anzai



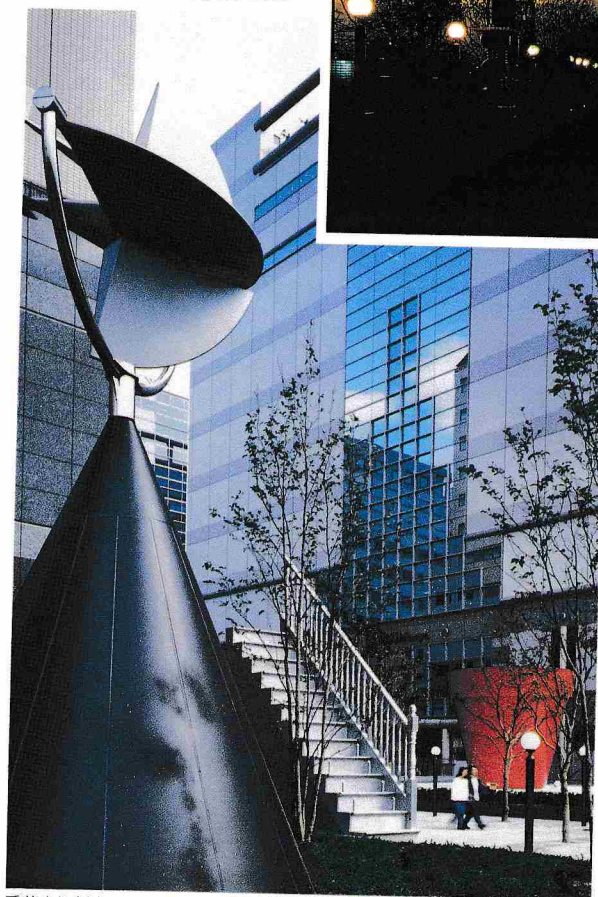
IFP ©S.Anzai



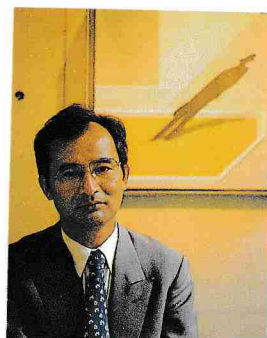
タン・ダ・ウー ©S.Anzai



牛島達治・柳 健司 ©S.Anzai



手前より新宮 晋・リチャード ウィルソン・ジャン ピエール レイノー ©S.Anzai



北川 フラム氏 ©S.Anzai

AACA特別賞審査講評 栄久庵憲司「JTビル」

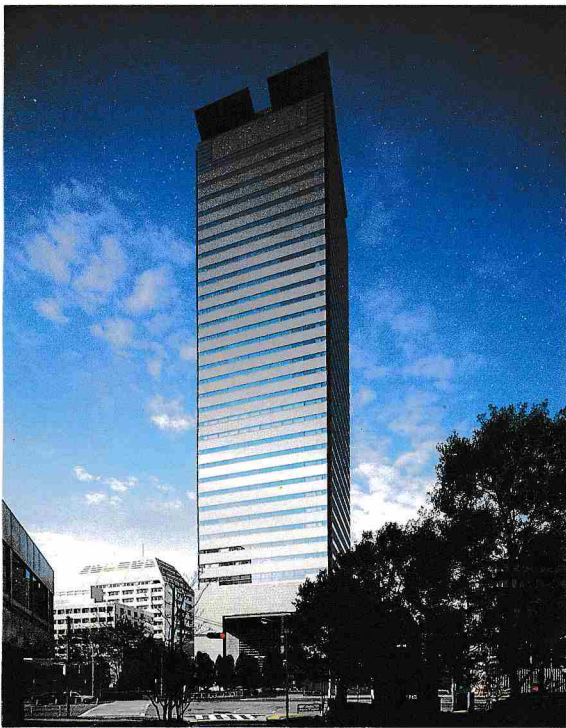
建築雑誌で見る建築の表情は作者の意図があつてか極めて限定されて写されている。人情とでも言うべきか見自らの生んだ作品が最もよく見える角度で撮られている。だから現地で実際のものを見ると時には期待は見事に裏切られ、がっかりする。写真と雑誌という限界があるのは重々承知の上だと知りながら中にはサギだと叫びたくなるものすらある。

こんなわけでaacaの審査会は必ず現地へ赴き、直接目で見、手で触れることにしている。またかというものもあるが、写真のイメージどおりだとホッと、遠路やってきた疲労が癒され、救われた気持ちになる。東京に住んでいる私にとって東京からのエントリーは楽だ。最近の

ビルは建築途中では幕で覆って外からみえないようにしている。それだけに毎日側を通っている者にとっては期待は大きく楽しみがある。建物が建てば建つほど醜くやりきれない東京になるだけに期待は大きい。裏切られる建築が多いなかで「JTビル」は格別だった。

赤坂というビジネス街の密集地、そこは歴史とものがたりに充満している。どちらかと言えば息苦しい場所が、開放的に計画されていたのには救いがあった。地上を視覚的に開放したのはいい。建築自身、多少金属的な冷たさはあるが工作の精度はよく、空間を形成している彫刻達もそそとして置かれ方のプロポーシオンがいい。ここまでは他の地にあるビルとあまり異なるところはない。言うなれば写真どおりということだ。ただ一番気にしていたことは土一升金一升の場合、

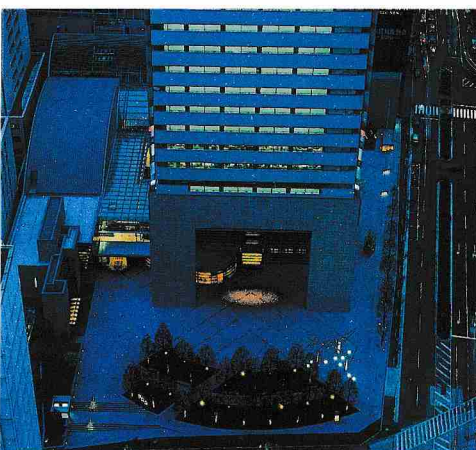
これは昔の言い方だが、土地一杯に建てようとするのが経済効果を考へて当然としているのか、どの町を訪れても判で押したように息苦しい風景が展開している。建てれば建てる程そうなるのだから問題だ。興味の中心は他の地上階部分とどうリンクしているかだ。ここに「JTビル」のランドスケープ感覚の躍如たるものがある。大法人ビル群が話し合いをはじめた結果だろう。ささやかながらも一息つける都心の場をつくった。古来、借景という見事な手法があるが、手法というより、心根のありようと言った方がいい。都心部のどこかで動きが開始されれば連鎖が起きる。「JTビル」は恐らく連鎖に答えたのかもしれないが、同時に連鎖が起きることを強く願ったに違いない。



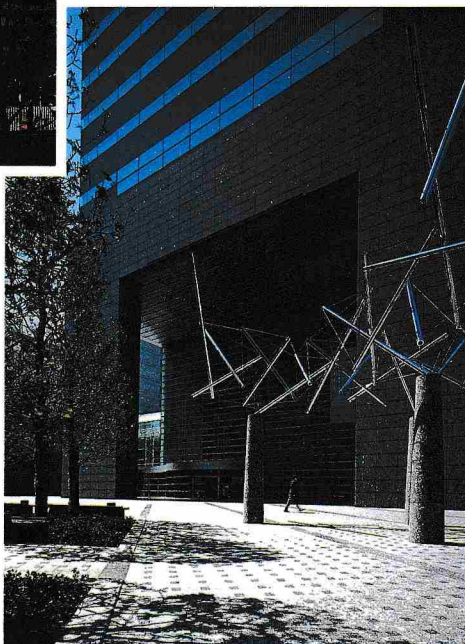
外観



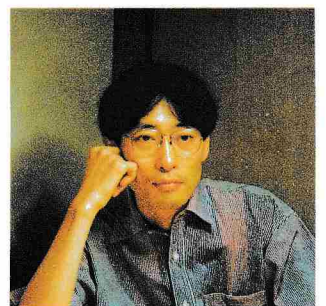
アトリウム



プラザ夜景



プラザ/ケネス・スネルソン作「Tゾーン・フライト」



日建設計 亀井忠夫氏



aaca会員
日本画家
社団法人 創画会理事
KUDOU KOUJIN
工藤 甲人
平塚市花水台5-36
TEL.0463-32-1760

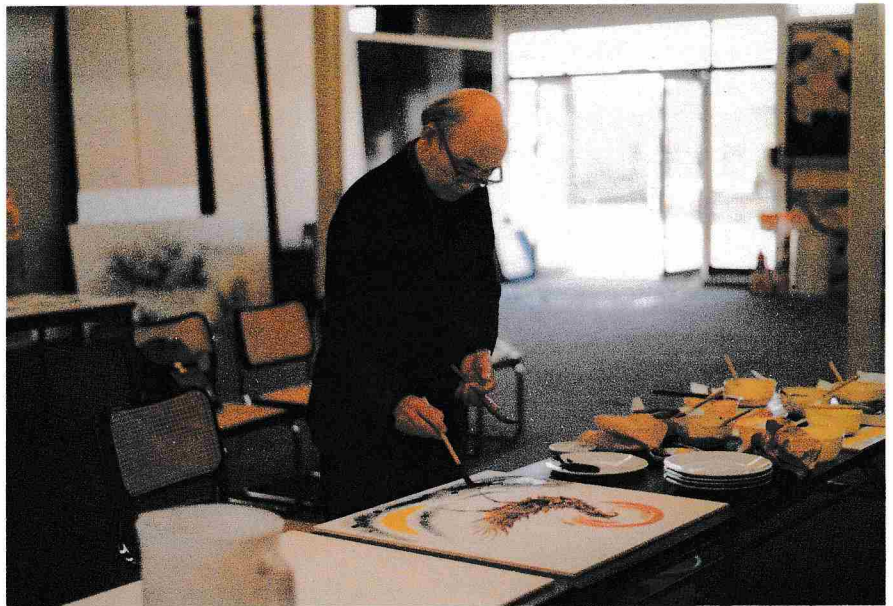
考えて見ると世の中矛盾する事柄が非常に多い。極端にいえばその矛盾があるから、スムーズに動いているようにも思える。たとえば革新と保守とか或いは良いとか悪いとか。最も根本的なのは生と死の矛盾だ。鶏の卵だって考へて見ると面白い。殻は中味を守るためにあるのだが雛は内側からそれを破るわけだからこれも力と力の矛盾の一つだ。

私は画家であるので、芸術の事を考へて見てもあらゆる芸術はやはり矛盾によって生成されてると思う。はやい話、絵を描いている時は全くの孤の中で仕事をしている。殆んど他の事は考える余地がない。然しである。その絵が完成近くなってくると一寸違ってくる。今までの孤から解放されて別な事を求めてくるようになる。それは何かというと、自分のこの感激を他に伝えたいという欲望である。多くの人に理解されて、出来得れば自分と同じ気持ちになってもらいたい。だからその発表の場として、個展とか或いはどこかへ出品でもしてみようと思うようになってくる。それは孤から普遍に連なるという事で、孤と普遍は全く相反するものでやはり矛盾である。

これは勿論美術だけではない。芸術と名のつく仕事はすべてそうである。たとえば文学にしても、どんなにいい小説を書いても読んでくれる人がいなければなんにもならない。もしそれがベストセラーにでもなったらたいへんな喜びだろうと思う。芝居にしても稽古の時は別として1人でやったんではちっとも面白くないだろう。多くの観客を集めて公演して

ピンピン客席からの反応を受けると一層熱演するという具合である。

このように芸術は全くの孤から出て後、普遍性を持たないと評価されない特質を持っている。絵画に於いても。たとえば虚と実とか或いは夢と覚醒、光と闇、その他もろもろの相反するものの合体にこそすべてのものの機微があるように思われる。



「日月の聖鳥」制作のため陶板へ直描き／昭和61年大塚オーミ陶業信楽工場にて





aaCa会員
都市デザイン会議 日本インテリアデザイナー協会 A・A.S.L.A(U.S.A)各会員
株式会社 上山良子ランドスケープデザイン研究所 代表取締役所長
UEYAMA RYOKO
上山良子
東京都新宿区信濃町3-1 シャトレ信濃町301
TEL.03-3341-7056

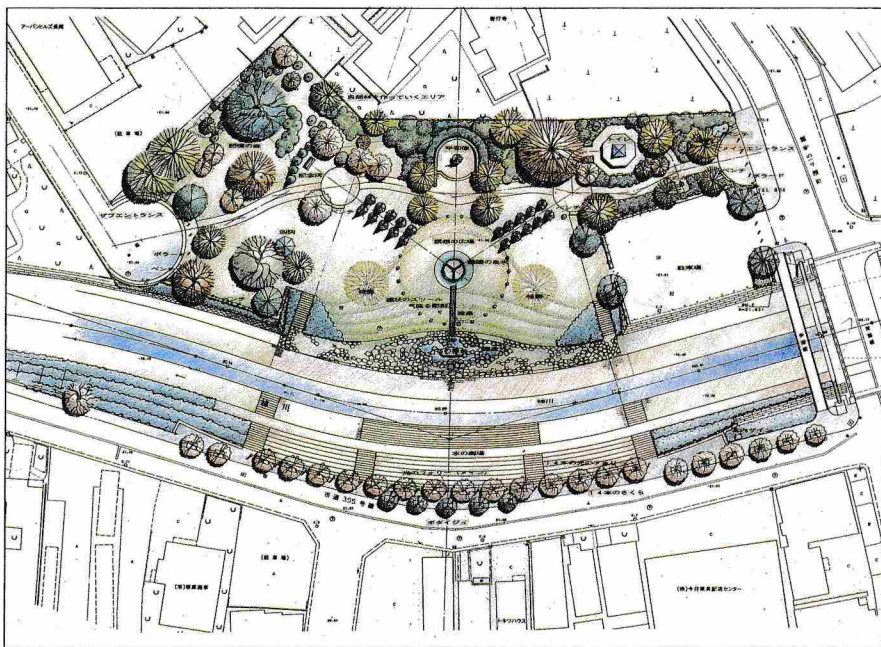
眼下に広がるエメラルドの海にくっきりと輪郭を描いている楕円の環礁。タヒチから数百キロ離れた美しい環礁の島。五年前ドクターストップの掛かった身体をこの楽園で癒しての帰路、機上からこの言語を絶する美しさに感動しつつも一抹の不安を感じた。この青い海のなかに繰り広がる海のランドスケープを我々の次の、そしてまたその次の世代まで楽しむことが果たして出来るのだろうか。最近ある一枚の報道写真があの思い出の風景とびたつと重なり、思わず背筋が寒くなった。まさか同じ島では。でも同じ南太平洋の島である。また生態系の大きな破壊が一国のエゴによりなされた。

我々ランドスケープアーキテクトは常に自然環境の保護と開発とのせめぎあいのなかで奮闘している。数百ヘクタールの大規模の敷地を如何に上手に保存し、その土地を如何に人が使わせて頂けるか自然から許可をもらうというつもりで、大地に耳を傾けて、計画したり、設計したりしている。使えるところの限られた国だからこそ、如何に開発するかという環境計画技術が生かされなくてはならない。一方地球のあちこちで為されている異常なまでの環境破壊の数々。ブラウン氏の言う「子どもたちから借りている地球に20世紀に我々の行った行為のつけを次の世代に回すべきではない。

N市から平和公園の設計を依頼された。空襲で壊滅された同市が都市のなかの小さな空隙を平和の願いをこめてモニュメントを入れた公園にしたいということだった。私は“場”のモニュメンタリティを提案した。“場”そのものが訪れた人々に何かを考えさせる空間を作る、瞑想の場に出来たらという願いを込めて設計したところである。来年終戦51年目の夏にオープンする。隣接する川を取り込んで水の劇場をしつらえ、亡くなられた千四百余名の魂を14本の光のフォリーと14本の桜に託している。光ファイバーに託された平和への希求のメッセージの矢は戦後ずっと市民の平和のシンボルとして親しまれてきた平和の像に集光され、全世界へと放たれる。

フランスの哲学者故F. ガタリはエコロジーの問題は人と自然のエコロジー、人と社会のエコロジー、そして人と人とのエコロジーを三位一体として政治的に

考察するエコゾフィの概念で解決していかなくてはならないと説いている。次の世代に借りている地球を返す時のため、我々一人一人の担っている責任は重い。

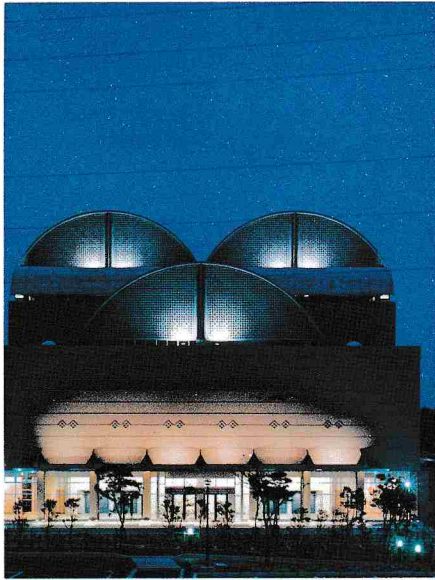


N市平和公園



株式会社A&T建築研究所代表
SHINDO SHIGERU
進藤 繁
東京都新宿区西新宿9-2-5
TEL 03-3369-3631

具志川市民劇場は音楽と演劇の各用途を主目的とした「響」と「燈」という2つのホールで構成されている。各ホールの上部には、沖縄特有の気候風土に対応するため大きなボルトの屋根を架け、両妻はコンクリートホローブロック（花ブロック）をレースを掛けたように取りつけ、屋根裏への通風とともに、視覚的な涼味を演出している。

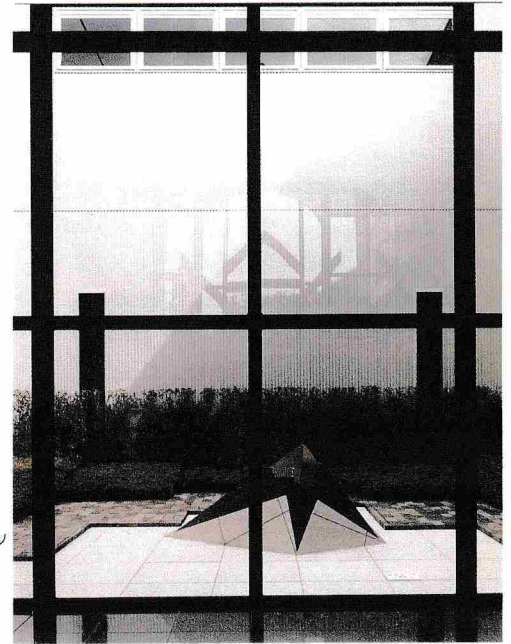


具志川市民芸術劇場
「響ホール」外観夜景
設置場所：沖縄県具志川市



藤原陽 代表取締役
FUJIWARA IKUZO
藤原 郁三
栃木県芳賀郡益子町葛沼中70
TEL 0286-72-6373

この新工場の敷地内から、工事中に縄文時代の遺跡が大量に発掘された。長い文化の積み重ねの上に今が存在するということで、それら大地の中にもれた歴史のエネルギーが、あたかも隆起したような力強さを表わした。



「隆起」
設置場所：
埼玉県美里町株カツ
デン美里工場中庭
900mmH×
2000mmW×
1500mmD

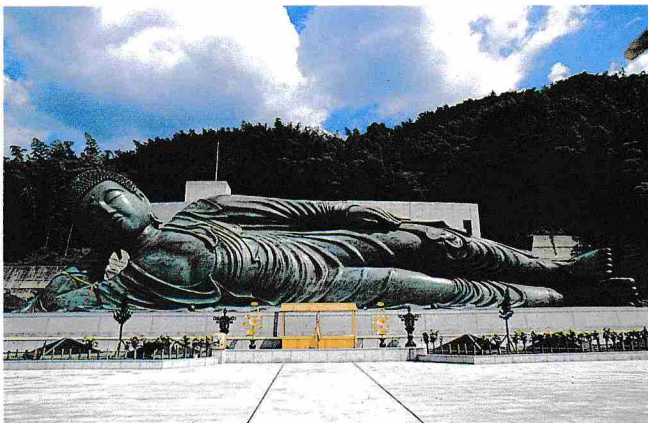


株式会社クロータニコーポレーション代表取締役
TOSHIO KUROTANI
黒谷 俊雄
富山県新湊市奈呉の江12-2
TEL 0766-84-0001

涅槃像は、全長40m、高さ11m、丁度ニューヨークの自由の女神を横にした大きさで約300パーツに分割したリン青銅のパネルを内部構造に取付け、パネル間を溶接にて一体化した作品です。

涅槃像とは釈迦入滅の場面をあらわすもので、古くは法隆寺五十塔内にも塑像として作られています。この像には優しさが溢れており、参拝者だれからも親しまれることを願っています。

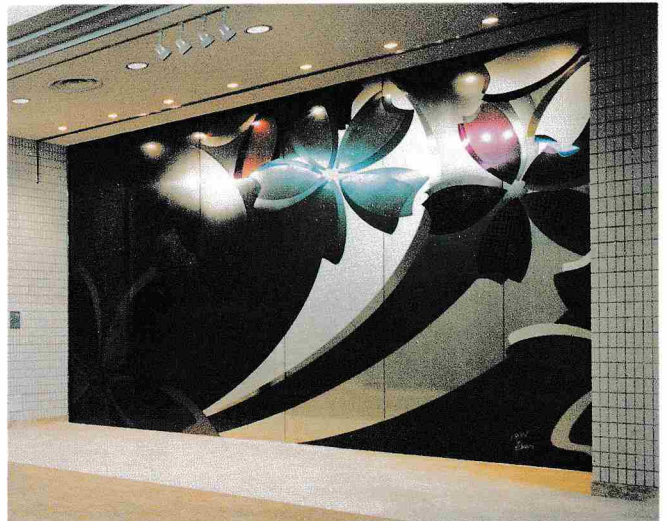
「釈迦涅槃像」
設置場所：福岡県篠栗町城戸
11000mmH×40000mmW



株ベアデザインアート 取締役社長
BEA HAMAZAKI
浜崎 ベア
東京都文京区大塚3-28-7 プラザフォレスト
TEL 03-3941-3203

現代のテクノロジーの進歩は止まるところを知らない。そんな中での生活者がいかに心平和に穏やかに日々過ごす事が出来るか21世紀へ向けての課題。モチーフは人々の交流の場にふさわしくいつも咲き誇る桜を不変発色ステンレスで施した。流通センターは桜の名所でもある。

「チェリーロード」
設置場所：平秋島東京流通センター TROCアールンホールロビー
3500mmH×6100mmW×60mmD(裏板含)





第71回1995年6月23日(金)
aaCa会員
彩布アーティスト
株式会社内井昭蔵建築設計事務所代表
UCHII NOBU
内井 乃生
東京都千代田区六番町13-12
TEL.03-5275-0881

“彩布”を創り始めて20年になった。1970年代コンクリート打ち放しのインテリアをモダンデザインだと賞賛する人と、ガレージが高速道路の下で暮らすようななどと非難する人にわかれ、戦後の建築に対する日本人の美意識が左右していた頃、私は美しい布、使いやすい環境の布の必要を感じ始めた。

特に、公団住宅の住生活と住意識の変化について調査し、今和次郎先生より「飾る」という人間の生活行為について哲学すると言われていた。団地サイズと呼ばれた狭小RC造のハコの中につめ込まれた人々の生活にうるおいと楽しさ、明るさをもたらすような強い布があればと考えつけていた。ちょうどその頃、川島織物が創立記念文化事業のひとつとして、テキスタイルスクールを市原の工場裏に創設することになり、手織りによる人間性回復の学校の企画・設計・デザインをすることになった。自分の手で自分だけの布を織り出し、身近に置きたいという人々の思いがあったからである。

そして、テキスタイルスクール卒業生と共に彩布スタジオを目黒不動前マンションの一室からスタートさせた。

真っ白い壁面に囲まれた一室で試作した彩布は赤色を主役とし、脇役を同系色のオレンジ・ピンク・赤紫などで固め、さらに対比の強い寒色のグリーン・ブルーなどを配し、明快で動きのある彩布デザインがスタートした。

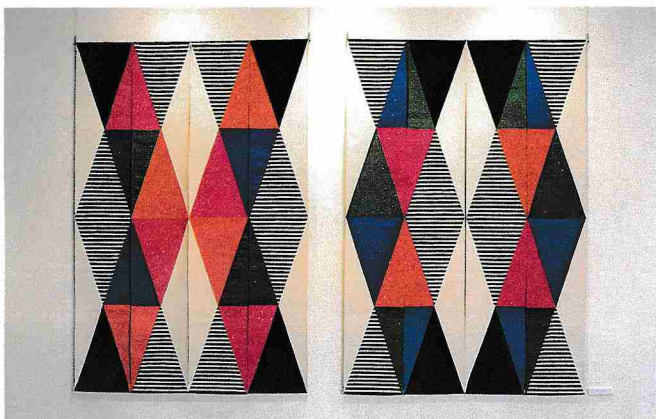
パターンは建築空間に同調しながらも動きと変化・リズム感を大切に、無機質化した空間にうるおいと暖かさをもたらす活性化する布、という願いを込めて“彩布”と命名したのである。

当初、天井の低い・狭いという団地サイズを中心に寸法を設定した。長さ180センチ前後、幅30～60センチの帯状のタペストリーを2本3本と並べ、各々のパターンが横につながって半円が全円に、三角形が四角形に変化するようにパターンを設定した。また、上下逆さにすると、全く異なったパターンに変形する面白さを楽しんだ。

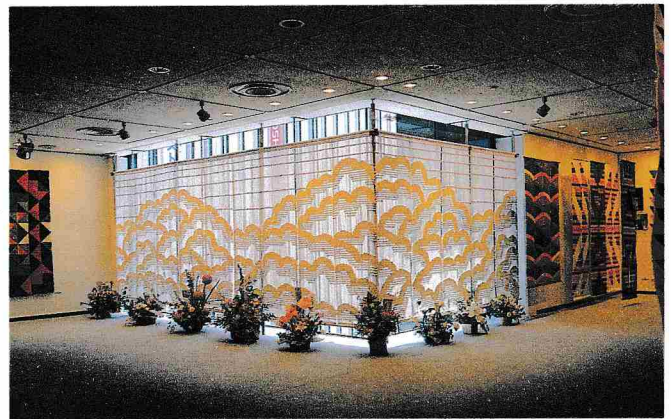
パターンのユニット化と、その組み合わせと組み替えによる大幅な変化の妙味を追い求めているうちに、日本の建築デザイン界はポストモダンへと足早に移行し、再び19世紀以前の装飾がもてはやされていた。

つくづくと思う。1945年以降の30年間は、日本だけでなく世界全体がモダンデザイン遊びに興じていたように思う。過去の伝統文化、装飾などをすべてを否定し、simple is bestのお題目を唱えつづけていたのである。その結果味気のない画一的な建築空間に不満を持つ市民の声を背に、無為無策のまま、旧き良きものを再び引っ張りだし、何とかしようと思っていたのだと思う。

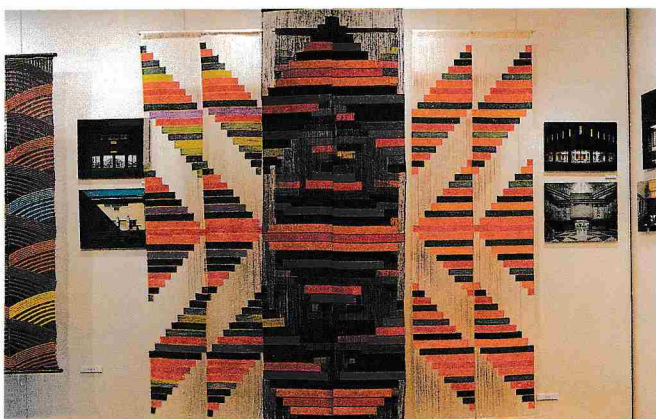
現在あるものは、過去のものとは似て非なるものである。ポストモダンは一歩進んでライトでもない。モダンデザインを母として完熟させたい。“彩布”はその味つけのスパイスの一つとして新味でありたいと願う。



彩布発想の原点となった作品 目黒不動前マンション 1977年



中庭に面した3面のガラス面に掛けた彩布 一宮博物館 1989年



透けた麻の縦糸をメインカラーの赤色で横につなげたもの 熊本テクノポリスセンター 1988年



白の十字架を強い対比色の彩布6本の組み合わせにより構成 明治学院大学玄関ホール 1992年



第72回 1995年7月28日(金)
aaCa会員
株式会社 儀村才治郎商店 代表取締役
ISOMURA KOUNOSUKE
儀村 浩之助
京都市下京区東本願寺前
TEL.075-371-0579

儀村才治郎商店は、明治38年、私の祖父・儀村才治郎（明治10年生）が創業者で、本店は京都駅近くの東本願寺の向い側にあります。私どもの本業は屋形鋳という職種で、神社やお寺の建築の装飾金物の製造をいたしております。祖父の仕事として東本願寺勅使門・御室仁和寺寢殿・神戸長田神社本殿・平安神宮大鳥居などが今日も残り、評価されております。

私はこの鋳職の家に生まれ、子供の頃は仕事場を遊び場所にして育ち、小学生の頃からその仕事を手伝うようになりました。昭和12年の小学校卒業時に戦争が始まり、軍需工場に人手がとられたために徒弟がいなくなり、中学校に通いながら仕事をできるようになりました。戦後一時期、神社やお寺の新築が無くなり、仏壇店を始めました。それから間もなく、伊勢神宮の式年御造営（第58回）が始まり、金銅金物の調製のご下命を受けました。その後、東京の浅草寺本堂、川崎大師平間寺本堂、明治神宮社殿復興、名古屋城天守閣再建等の鋳金物を受注しました。

その頃に村野藤吾先生設計、(株)大林組施工による大阪・新歌舞伎座の工事が始まり、大棟の飾り（原形は辻晋堂先生作）の仕事を受注しました。この仕事には予算・納期・重量などの厳しい制約がありまして、高さ約4メートルの棟飾りを製作するのにブロンズ製では重量オーバーになり、その条件をクリアすることが出来ませんでした。いろいろ工夫を凝らした結果、鋼材で骨組みを作り、鋼板の叩き出しで型を整えることに成功しました。電飾など難問題もありましたが、当時、貴重品であったステンレス製のビスを使うこと、また、大変珍しい材料だったエポキシ樹脂を使うことによって、30有余年経った現在もその姿をとどめております。余談ではありますが、ニューヨークの自由の女神の修理の模様をテレビで見たとき、偶然にも同じ工法であることを知り、職人の考えることは、みな同じであると痛感した次第です。

吉田五十八先生との出会いは、東京駒沢の三越シルバーハウス内の食堂の天井工事でした。その頃、私どもはFRPによる建築部材を開発し、工事実績もありました。しかし、天井の面積が大きく、

FRPで施工することが許可されませんでした。そこで、アルミ板の打ち出し加工による製作を提案しました。工事担当の清水建設(株)の所長さんもそのようなことができるのか、と疑いを持たれましたが、私は「自動車のロールスロイスでも大型の飛行機でもその曲面は金属板を打ち出して作っています。手で作るかぎり出来ないものはありません。」と申し上げ、その仕事を完成させました。吉田先生は「絵に描いたように出来たね。」と評価してくださいました。

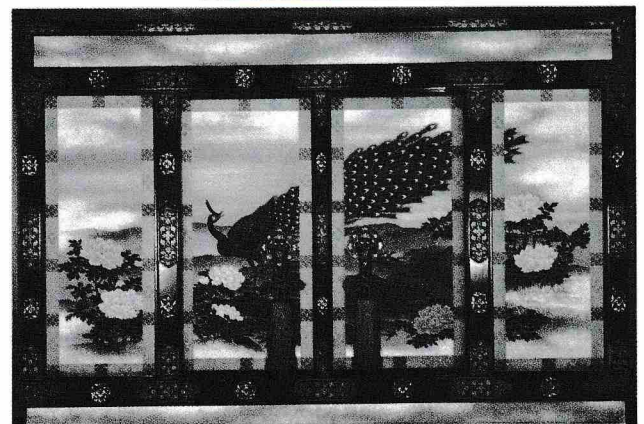
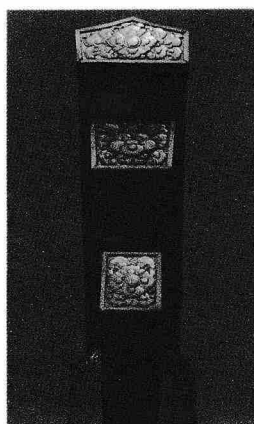
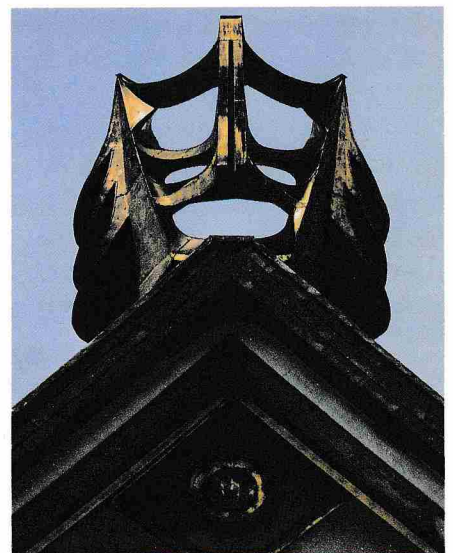
私は建築に関する学歴は全くありませんが、仕事を通じて立派な先生方の直接指導を受けた幸せな男でございます。古くは藤島亥治郎先生、岸田日出刀先生、吉田五十八先生、村野藤吾先生、大岡實先生、その他諸先生のお陰でいろいろな仕事を残させていただき、図らずも平成4年に第17回吉田五十八賞特別賞を拝受することができました。

建築の装飾には長い歴史があります。私の知る限りでは約5000年前、メソポタミアの神殿建築で、柱の表面に赤と黒の円錐状に焼いた無数の粘土で幾何学的模様が施されたものがありますが、これが建築の装飾の始まりだと考えています。

ブルーノ・タウトは伊勢神宮の社殿の建築を装飾のない建築と評価していますが、実際に神宮の社殿を間近に拝見すると、華麗な金銅金物によって加飾されております。しかし、それは非常に控えめで、必要な箇所だけに金物を取り付けて、装飾として応用されています。建築の装飾は例えば洋服のボタンのようなもの

です。ボタンは洋服の生地によってその色が決まり、デザインによってその大きさが決まるものです。ボタンのために洋服のデザインが変わることはあり得ないことです。このように控えめであって、建築にあった鋳を作るのが、私どもの仕事だと思っております。

私どもは常々「控え目の鋳は建築に華を添える」ことを提言しています。どうか皆様も「装飾は罪悪」などとお考えにならずに、建築に合った装飾をお考えいただきたいと願っております。私自身、今から何年生きるか分かりませんが、これに徹して仕事をしていきたいと思っております。





第73回 1995年8月18日(金)
 aaca会員
 株式会社 一竹辻が花 代表取締役
 KUBOTA ICCHIKU
 久保田 一竹
 東京都世田谷区北沢2-36-18
 03-3468-1919

命を染めし 一竹辻が花

思い起こせば20才の時、東京国立博物館で室町時代の「辻が花染」との衝撃的な出会い以来、私の人生は大きく変わった。

14才で手描友禅の道に入った私は、20の時にはすでに一人前の仕事をし、腕にも自信が少なからずあった。しかしその「辻が花」を見た時に、まずその名称も初めて聞きし、何とも言えぬその幽玄さ、そして精緻をつくした絞りと墨描。昔はさぞ美しかったであろうと思われる色彩。またそれが350〜360年経った時間がかもしだす「詫・寂」に私は魅了され、閉館の時間になったことも知らずに2時間以上もその小切れを見入っていた。

守衛に閉館ですよと後ろから声をかけられ初めて我にかえた。その時の衝撃は今も鮮明に覚えている。先人達は何と美しい染物を制作していたのだろうか。自分は今まで何をしていたのだろうか。今までの自らの過信を恥じ、「辻が花」の名称すら知らなかった無知を恥じ、まるで魔法にかかってしまったかのように帰宅した。

それからというもの何かにつけ「辻が花」のことが頭に浮かび、私の挑戦が始まった。想いは強いが、周囲の状況がなかなかそれをゆるさず、その後世界情勢は悪くなる一方だった。そして太平洋戦争勃発、召集、敗戦、そしてシベリアで

の6年に渡る抑留と研究どころではない状態となっていった。

シベリアでの生活というのは口では語りたいたいものだが、連日、ラポータというノルマのきつい仕事が課され、それも厳寒の中でのラポータはまさに生き地獄だった。毎日、戦友達が多数死んでいった。食事はカステラ大の黒パンが一日に3食のみ。生きていけるはずもなかった。遺体を埋葬するのも我々の仕事。真冬など凍り付いた大地は岩よりも硬く、いくら掘ろうとしてもツルハシが弾き返される。何とか30cm程掘って死者を埋め、その上に土というより氷に近い土をかける。春になるとその氷が解け、無残にも遺体が現れてくる。自分も生きて帰れるとは思っていなかった。そんな生活の中で唯一私を慰めてくれたのがシベリアの大地に沈む雄大な夕陽の美しさであった。日本の家族を、そして自らの無念を思いつつ見る夕陽に私は人一倍強い想いをもっていた。私の「光響・30連作」が夕陽から始まっているのもそんな理由からだ。

このような苦しさの中からも自分は生き延び、無事復員した。辻が花の研究にあたりこの苦労が私の糧となった。なぜなら苦労も乗り越えられる自信があったからだ。

帰国後、しばらくは友禅染で生計をたて、5年間の研究費を蓄えた。5年あれば何とかなるだろうと想ったのが甘かつ

た。研究は失敗の連続でとうとう蓄えをすべて費やしてしまった。毎日の生活費にも支障をきたすようになってしまった。家内は遺産で受け継いだすべての宝石、着物を売り払い支えてくれた。ここであきらめたらすべての苦労が水の泡になる。家族の苦労が台無しになると思い、さらに研究を続け、ある時何とも言えない「染」が生まれた。

私の辻が花はこんな貧困と失敗の中から生まれた。着物が買えずに同じ生地にも何度か何度か染料をかけていった。それがある時、色の中から色が出、色の奥から色が出るといった多色染めの美しさが発見された。これが私の染の原点である。現在、私の個展がワシントンD・Cのスミソニアン国立自然博物館で来年4月まで開催されている。同館始まって以来の現代作家の個展という名誉ある展覧会となったことに嬉しく思っている。またこの度のスミソニアン展において、オートナー館長より、一竹芸術には、今世紀に生きる人類に対する大きなメッセージがある。それは、今、人類が忘れかけている「自然の畏敬の念、敬意」であり、ひいては、それは、来たるべき二十一世紀へ向けての人類最大のテーマではないであろうかというメッセージをいただいた。この言葉を励みに、私は命の続く限り作品を作り続けてゆきたい。

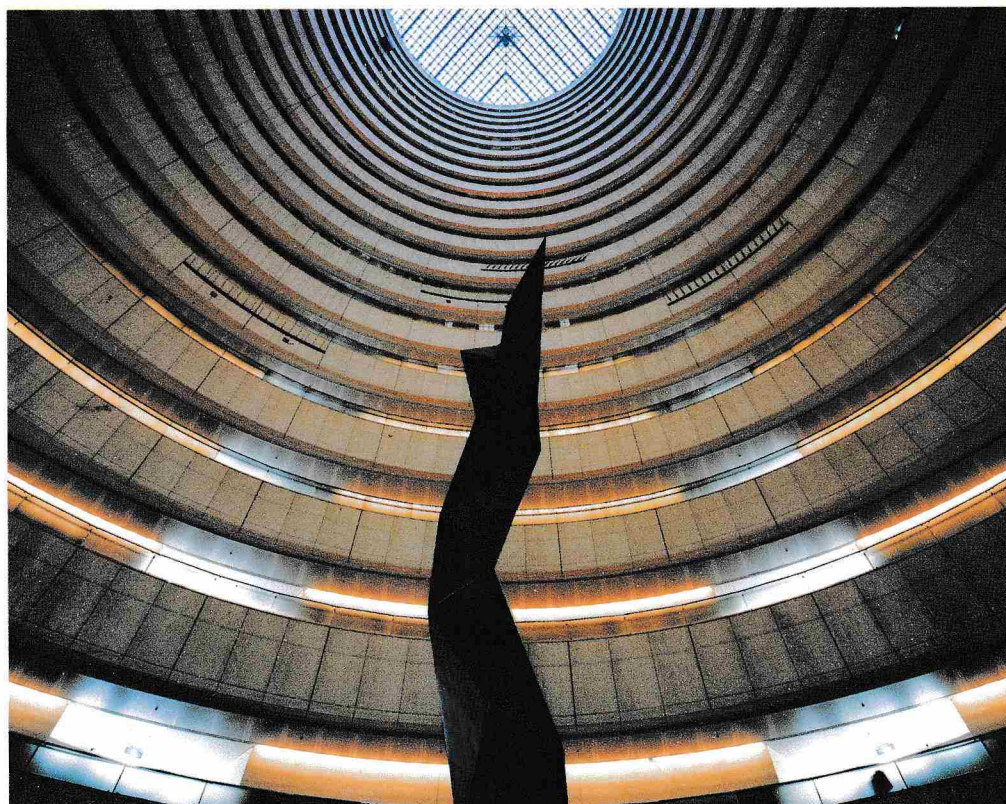


苑



燦

名作は、永遠なる響き。



日本の近代建築史とともに歩んだ矢橋大理石。建築石材のパイオニアとして、後世に残る名建築に、数々の足跡を残してまいりました。日銀本店（明治36年）、東京駅（大正3年）、国会議事堂（昭和11年）。近年では、東京芸術劇場、東京都庁、東京国際フォーラムほか、名だたる建築において、外壁や内装の分野で貢献しています。上品で落ち着いた質感、耐久力を秘めた安心感。太古の眠りから目覚めた石材は、未来に向けて、永遠なるシンフォニーを奏で続けます。

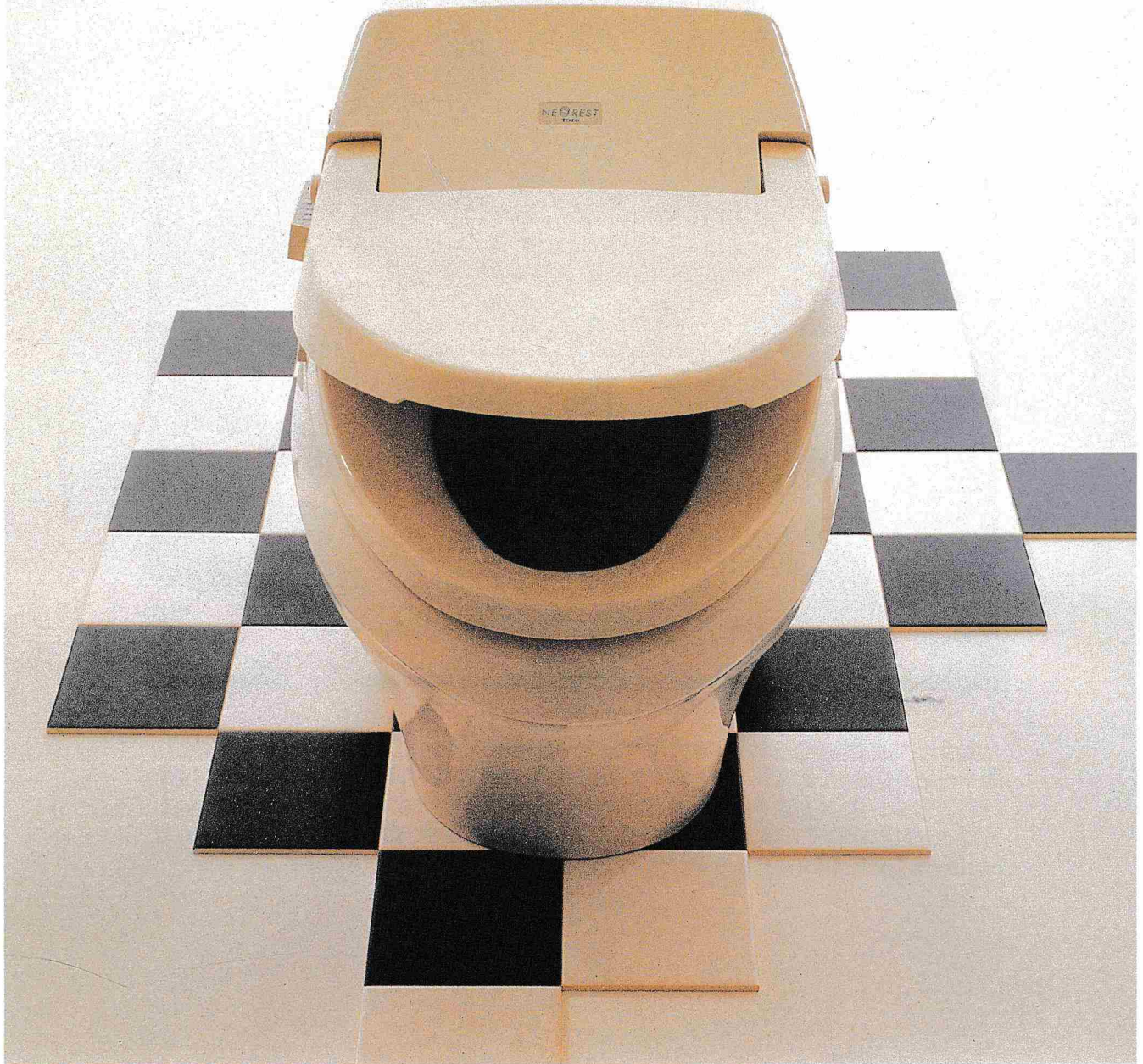
SINCE 1901

YABASHI

矢橋大理石株式会社

「一等賞の便器」

と注文されたら、わたしたちTOTOの中では、このネオレストEXをおすすめします。



一等賞の理由

①タンクのいない水道直結タンクレス便器。「新洗浄方式(シーケンシャルバルブ方式)」の開発で、水道管と便器を直接つなげることに成功。タンクに水を貯める必要がないので連続して流せるうえに、給水管もなく静か。1度に使う水の量も、40%程節水できます。②トイレ空間を広く使えるローシルエット便器。タンクがない分、トイレはスッキリ。収納や窓が広く、大きく、タップリととれる訳です。③使い勝手がとてもいい多機能一体型便器。ウォシュレット機能をはじめ、オゾン脱臭や室内暖房機能も装備。操作はじつに簡単です。

※カタログご希望の方は、住所・氏名・電話番号を記入の上
〒107 東京都港区赤坂7-3-37 東陶機器株式会社 広告宣伝部「EX-1」係までご請求下さい。

NEOREST
(ネオレストEX)
TOTO

ビルも森に 変えられます!!

自然が織りなすさまざまな営みの中で
緑が持つ役割は大きいものがあります。
限らない広がりを見せる未利用都市空間を
緑により快適な住環境に変えてゆくカーナートは
明日の町づくりの方向性を示しています。



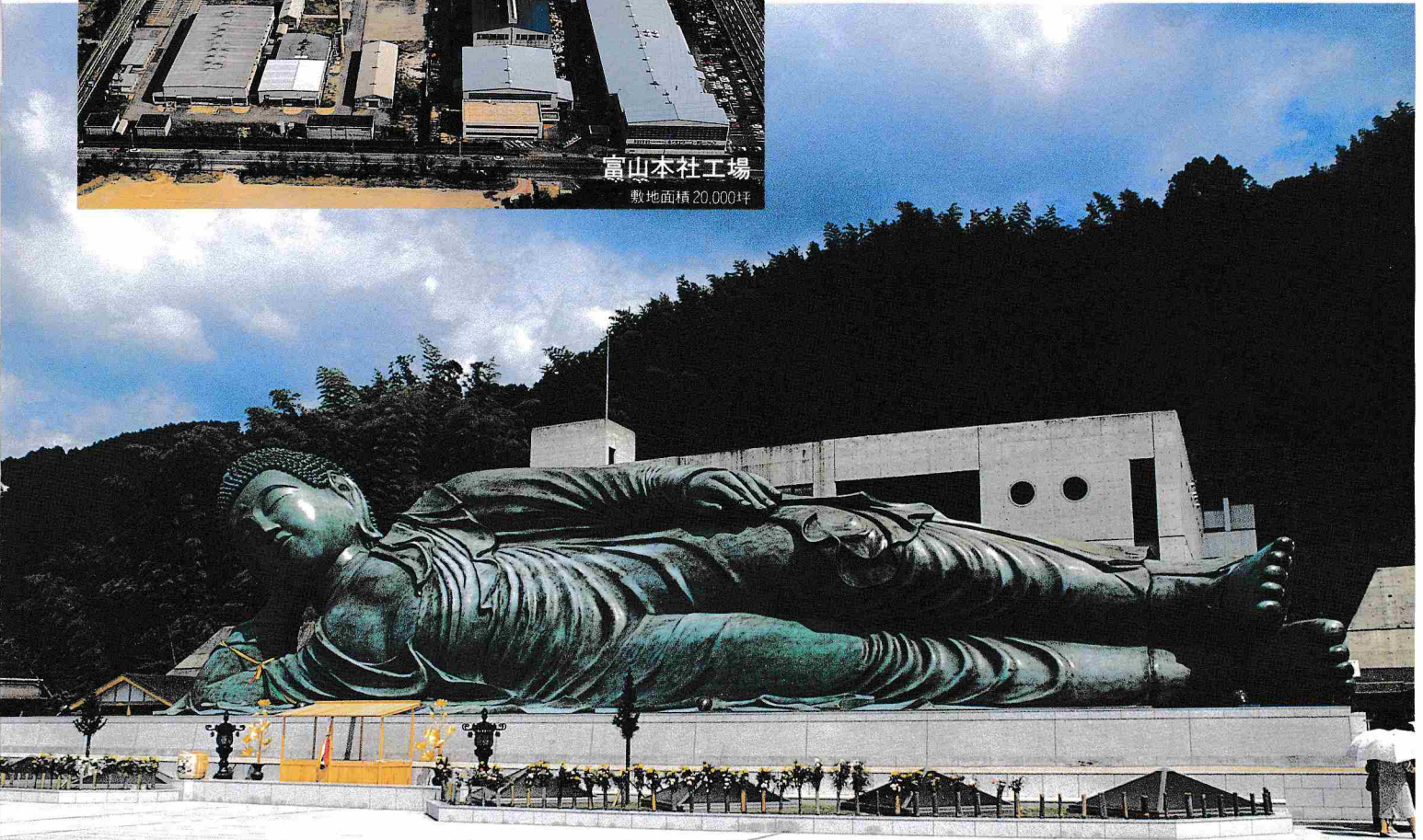
総合防水メーカー

日新工業株式会社

営業本部 ■103/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

札幌	☎011(281)6328 (代表)	名古屋	☎052(933)4761 (代表)
仙台	☎022(263)0315 (代表)	金沢	☎0762(22)3321 (代表)
宮城	☎048(642)5811 (代表)	大阪	☎06 (533)3191 (代表)
東京	☎03(5644)7221 (代表)	高松	☎0878(34)0336 (代表)
千葉	☎043(227)9971 (代表)	広島	☎082(294)6006 (代表)
横浜	☎045(316)7885 (代表)	福岡	☎092(451)1095 (代表)

つねに前進する姿勢が、 新たなカタチを生み出します。



世界最大のブロンズ(燐青銅鑄物) 釈迦涅槃像(全長41m/高さ11m)平成七年九月完成

施主 九州篠栗四国総本寺南蔵院
住職 林覚乗
原型制作 仏師 山高龍雲
監修 情報彫刻家 菊竹清文
元請 新日本製鐵株式会社

工芸美術品・神、仏具・鑄造・販売

非鉄金属全般・金、銀、銅、アルミ・銅合金、各種合金・製造販売

鑄造
製作

人と技術で、世界にトライ
株式会社 クロタニコーポレーション

本社・工場 / 〒934 富山県新湊市奈呉の江12の2 ☎(0766)84-0001 FAX(0766)84-2000
東京支店 / 〒101 東京都千代田区内神田1-15-15 ☎(03)3292-0511 FAX(03)3295-6777
大阪営業所 / 〒541 大阪市中央区北1-10北浜小林ビルF ☎(06) 231-0222 FAX(06) 231-0199
新潟営業所 / 〒950 新潟市下木戸1丁目542 ☎(025)273-0001 FAX(025)273-0119

THE HUMAN DIMENSION FROM KOTOBUKI



コーディネイト

アートで創造する空間。

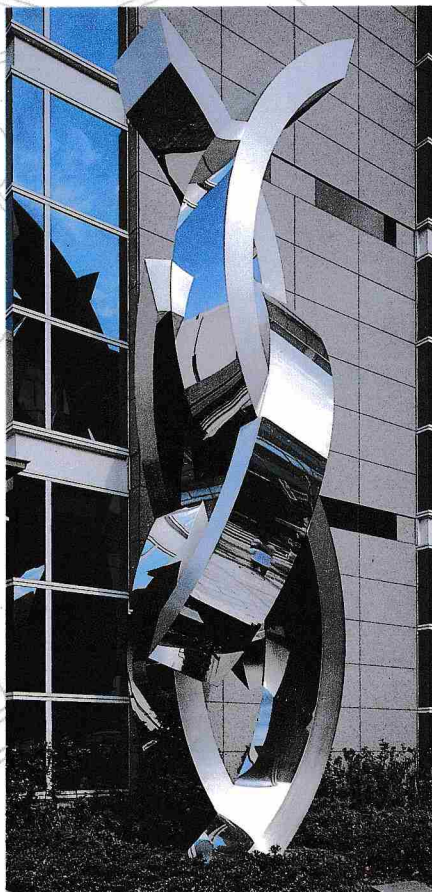
コトブキのタウンアート事業

K O T O B U K I

株式会社コトブキ

タウンアート事業部 東京都港区浜松町1-14-5 コトブキD.I.センター4F 〒105 Tel.03-3434-3042

札幌011-221-3496/青森0177-43-7321/秋田0188-63-9511/盛岡0196-25-0713/東北022-284-1011/水戸0292-25-8222/北関東028-662-7251/千葉043-275-2161/埼玉048-883-5566/
武蔵野0422-53-8221/横浜045-471-7151/新潟025-243-2216/長野026-228-9722/静岡054-282-8792/名古屋052-773-4321/京都075-371-3221/大阪06-396-5111/金沢0762-47-7422/
神戸078-271-8585/岡山086-246-0818/高松0878-51-9140/広島082-230-1261/山陰0852-22-7511/九州092-441-0763/長崎0958-64-0102/鹿児島099-258-2361/沖縄098-863-7803



Monument

八尾市平和モニュメント<光の道しるべ>
ステンレス

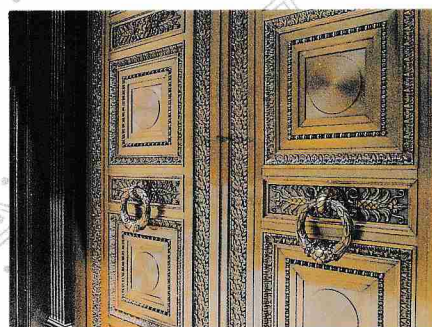
人と空間のコミュニケーション。



Relief

東京消防庁消防学校<都会のシルエット>
アルミ、真鍮、木

<田島>の願いは、「人間のための環境」を創造することです。人の心を潤し、また刺激する人間性豊かな空間を提供するため、金属という素材を通してさまざまな環境デザインのニーズにお応えしています。



Ornamental

三井本館・鑑戸
キャスト ブロンズ



Sign

所沢航空発祥記念館
ステンレス

株式会社 田島順三製作所

本社 〒100 東京都千代田区永田町2-14-3 赤坂東急ビル ☎(03)3581-6296

●東京(03)3581-6291 ●大阪(06)203-4151 ●仙台(022)225-5844 ●横浜(045)212-3281 ●名古屋(052)571-5231 ●福岡(092)771-7461 ●四国(0878)62-9541 ●神戸(078)321-2561
●特販事業部(03)3260-9021 ●デザイン室(03)5689-0878 ●海外事業統括本部(03)3580-0021 ●海外事業所:ロサンゼルス・タイペイ・ホンコン・シンガポール・クアラルンプール・マニラ・ソウル・バンコク